The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国近世・近現代史のフィールドワーク
Author(s)	片山, 剛
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27133
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

❷

中国近世・近現代史のフィールドワーク

片山 剛 大阪大学文学部教授
専門：東洋史（中国史）／フィールド：中国江南デルタ・珠江デルタ

■論文名および内容（後述の論文・まとめも参照）

1．濱島敦俊・片山剛・高橋正「華中・南デルタ農村実地調査報告書」『大阪大学文学部紀要』第34巻，576pp.(1994)

2．「珠江デルタ桑園囲の構造と治水組織―清代乾隆年間～民国期」『東洋文化研究所紀要』第121冊，pp.137-209.(1993)

3．「珠江デルタの集落と「村」―清末の南海県と順徳県」『待兼山論叢（史学篇）』第28号，pp.1-30.(1994)

4．「清末・民国期，珠江デルタ順徳県の集落と「村」の領域―旧中国村落の再検討へ向けて」『東洋文化』第76号，pp.163-199.(1996)

1は1989～91年，デルタ開発と商業化，社会構造とその変動等をテーマに，延べ6ヵ月以上にわたって長江下流・珠江の両デルタで実施した農村歴史調査を，古老から得た口碑資料を中心にまとめた記録。

2は南海・順徳両県に跨がる桑園囲（輪中地帯）について，現地踏査による実見を文献研究に活かし，立地と開発形態，開発進展による治水環境の変化とこれに伴う治水プランの歴史的転換等を跡づけた。

3はフィールドで得た知見を基礎に，地縁的社会集団の最小単位（集落＝自然村）は「社」「坊」と表現されること，行政体系の末端単位たる「村」(行政村）は，単一の社・坊ないしその民間自生的結合体からなることを論証。

4は旧中国の農村集落は境界・領域を欠如しているという通説に対し，論文3を基礎に，清末・民国期の順徳県では，社・坊や「村」が境界・領域を有することを論証し，その性格を初歩的に検討。

■はじめに

私は中国社会経済史，とくに明清以降の広東珠江デルタ農村社会史をテーマに，従来，地方志や族譜を史料とする文献研究を進めてきた。しかし，概説で述べたように，集落レヴェルに関する文献資料は僅少である。堅固な基盤に立脚した農村社会像を構築しようとするなら，集落レヴェルの実態解明は不可欠であり，文献資料の欠落を補うべく，旧中国を生きた老農が語る口碑資料に期待せざるを得ない。これを目的に，上司の濱島敦俊教授と実施したのが，89～91年のフィールドワークである。そして，期待に違わず，文献が語らぬ貴重な示唆を，老農の口碑資料から得た。その一端については，後に触れることにして，以下，私のフィールドワーク実施→資料集刊行→論文執筆を例に，中国史のフィールドワークを紹介していこう。

調査テーマは，10世紀以降に始まる漢族のデルタ開発であり，具体的課題として，立地・技術条件と開発形態・生業，移住から定着への諸過程，開発主体と社会組織・民間信仰（およびその変容），開発進展と商業化，等々がある。調査地域は，濱島氏が文献研究を行なってきた江南デルタと，私の研究対象である珠江デルタである。前者については，立地と生業の面から，①棉作・棉業地帯，②桑栽培・養蚕・製糸（繰絲）業地帯，③開発が最も遅い低湿地地帯

を選び，後者については，開発進度と生業の面から，①開発が古く，土地利用において「桑基魚塘」の特徴をもつ順徳県（現順徳市）龍江鎮，②①より開発が新しく，水田稲作を主とする順徳県大良鎮，③人工堤防を築き，河泥堆積による陸地化の開発が現在も進行中の番禺県万頃沙鎮を選んだ。デルタ地域には，今世紀にいたって開発が始まり，集落形成を始めとする開発過程をある程度追跡しうる魅力的な場所も存在する。なお，以下では，紙幅の関係で，主に珠江デルタ調査に関連させて叙述したい。

■準備

①許可

外国人が中国でフィールドワークを行なう場合の基準や手続きについては，管見では，公開された形の規定はない。しかし，ゲリラ的調査を除けば，調査先の政府の許可と中国側パートナー（以下，パートナーと略す）とが必要である。中国には，中央～省（直轄市）～市～県～鎮の各レヴェルに政府があるが，私の経験やくちコミ情報によれば，どのレヴェルの政府と交渉して許可を得るかは，調査内容，調査者やパートナーがもつ人的関係（所謂コネ），調査先の省（直轄市）の事情の相違等によりケースバイケースで，一般化できないのが現状である。国家教育委員会（文部省に相当）という中央官庁の許可を得て実施された例もあれば，県・鎮政府の許可のみで実施された例もある。また，省政府の許可を得られず，日程や内容の大幅変更を余儀なくされた例もある（「竹のカーテン」のため，不許可の理由すら不明）。どのレヴェルの許可を得るべきか，また，得ることができるかに関しては，外国人には不明な点が多く，その手続きを含めて，パートナーに依存せざるを得ないのが実情である。その意味で，各種事情に精通して適確な判断を下し，交渉にも長けたパートナーを得る必要がある。

パートナーとしては，学術交流があり，調査テーマに関係のある研究を行なっており，そして最も重要な点として，本人がフィールドワークの必要性を深く認識している研究者を選びたい。ただし，中国には“省壁”という障壁があるらしく，パートナーの大学や社会科学院が所在する省域を越えての調査は不可のようだ（パートナーが中央官庁や他省政府の許可を獲得できる人なら別だが）。そして，江蘇省での調査は，パートナーが江蘇省所在の大学の教授であっても，許可獲得が困難と聞いている。情勢に多少の変動はあろうが，“省壁”も考慮して調査地・パートナーを決める必要がある。

珠江デルタ調査は，広東省社会科学院の教授をパートナーとし，パートナーが，まず社会科学院の許可を得，それに基づいて広東省政府の許可を得て実施された。他方，江南デルタは，江蘇省・浙江省・上海直轄市の3省市にわたっている。元来の計画では，上海の復旦大学の教授（複数）をパートナーとし，復旦大学の許可・協力に基づいて，3省市にわたる調査を実施する予定であった。しかし，上述した“省壁”により，復旦大学の許可・協力で行ない得るのは，上海市域に限定されることとなった。その後，浙江省域については，浙江省社会科学院の教授をパートナーとして実施したが，江蘇省域については，今だに視察にとどまっており，本格調査にはいたっていない。そして，89～91年の江南デルタ調査は，

いずれも県・鎮政府の許可のみで実施された（95年秋に再開した浙江省調査では，省政府の許可を得た）。なお，パートナーから，調査に当たっての注意（例：解放後のことはあまり聞かぬように）を受けることもある。

中央官庁や省政府の許可を得れば，業務ビザが下りる。県政府の許可では，業務ビザは出ないので，中国専門の旅行社などを通じて観光ビザを取得する。観光ビザでも支障はない。なお，現在，検疫はない。

②メンバー

メンバー数は，資金額や調査内容等を考慮して決める。日本側は，主に濱島氏と私で，調査地によって大阪大の高橋正教授（地理学が専門）や高知大の三木聰教授に参加して頂き，また留学中の大阪大院生の助力も得た。中国側は主パートナーに加え，若手研究者に通訳等の面で援助を得た。中国語の標準語（「普通話」）が通じる地域は限られているので，調査地に応じて，日本語↔現地語，あるいは普通話↔現地語の通訳が必要になる。インフォーマントから採訪を行なう直接当事者であるから，礼節をわきまえ，かつ調査趣旨を理解しうる人材を得られるか否かが，成果に影響する。なお，歴史調査ではあっても，集落，生業，市場圏，水利等は立地条件を考慮する必要があり，地理学者の参加が望まれる。

③資金

87～88年の予備調査では，三島海雲記念財団・サントリー文化財団の助成金を利用した。89～91年の本調査では，日本側メンバーの旅費については，文部省科学研究費補助金（国際学術研究，大阪大と復旦大との大学間共同研究）を江南デルタ調査に，文部省科学研究費補助金（国際学術研究，学術調査。京大東南アジア研究センターが中核）とサントリー文化財団研究助成金とを珠江デルタ調査に充当した。中国側メンバーの旅費と雑費には，三菱財団人文科学研究助成金を充当した。私たちの場合，授業との関係で，1ヵ月余の調査を断続的に重ねていかざるを得ず，資金も複数年にわたる形で申請した。

④その他

古老からの採訪を合理的に行ない，調査漏れを防ぐために，調査項目表（一例を報告書1の末尾に掲載）を準備する。これは，パートナーが政府から許可を得る際に，調査目的・内容を示すためにも必要である。このほか，農村基層概況調査表（行政村ごとの各種統計を記入）や農民個人調査表（古老ごとのデータを記入）を準備する。

■現地・調査

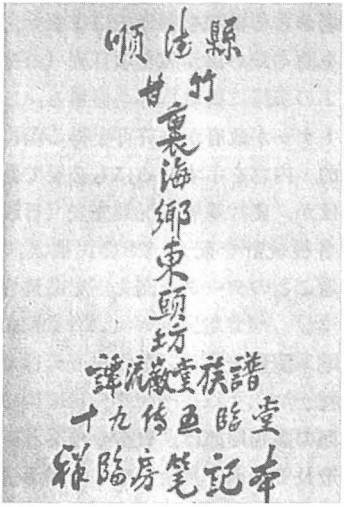
①日程

1回の調査期間は，資金や授業との関係で，最長でも1ヵ月余となった。予備調査なしに，初めて調査地を訪問する場合の日程配分は，次のとおり（珠江デルタの場合。香港に立ち寄るので，大陸部の日数が少ないのを除き，江南デルタもほぼ同じ）。香港3日（文献収集と農村部参観），広州3日（打ち合せと文献収集），県政府3日（聴取），鎮政府2日（聴取），4～5行政村に10～13日（1行政村につき2～3日の聴取），広州2日（打ち合せと文献収集），次年度調査地の予備調査3日，香港2日（文献収集），休日と移動日が8日，合計1ヵ月余である。95年からの官公庁週休2日制の開始により，今後は土日を移動日にしないと時間のロスが多くなる。なお近年，廟が復活し，擬似廟会（祭礼）が行なわれ

る所もある。廟関係の調査なら，廟会時期が狙う方が収穫は大きい。

②装備

一眼レフカメラ，ポラロイドカメラ，ビデオカメラ，テープレコーダー，地形図（1/25000～1/100000），方位磁石，巻尺，万歩計，トレーシングペーパー，芳名録（大きめの手帳），名刺，常備薬など。



■写真5・2・1　順徳県龍江鎮東頭管理区で見た族譜（手抄本）

族譜（写真5・2・1）や土地証などの文書を撮る機会もあるので，ピント合わせが確実な一眼レフカメラは必携である。フィルムは，お世話になった方に送る人物写真が非常に多いのと，ストロボなしで撮る時とを考慮して，現在はISO400ネガフィルムを使用している。ビデオカメラは，暗い所でもよく写る。今や必需品であろう。

調査では，多くの人に会う。相手の顔と名前を覚えるのは最低限の礼儀で，コミュニケーション成立に不可欠だが，これがなかなか大変。そのために準備したのが，ポラロイドカメラと芳名録である。ポラロイドは，各人につき2枚撮り，1枚は本人に差し上げる。これが結構喜ばれる。もう1枚は私たちの記憶用で，写真の余白に人名などのデータを書き込んでファイルする。芳名録には，本人に姓名・所属・職業などを書き込んでもらう。この2つは，調査中のみならず，帰国後の整理にも役立つ。また，私たちのことを覚えてもらう必要もあるので，名刺はたっぷり用意する。

小縮尺の地形図は，集落の立地・分布や付近の鎮との地理関係などを知るために不可欠である。ただし中国では，地形図は公開されていない。非公式に利用できる機会もあるが，念のため，民国初年に中国軍が作成し，後に日本軍が複製した地形図を用意する。布目潮渢・松田孝一編『中国本土地図目録』（1987）東方書店が役に立つ。日本軍の被害を受けた人もいるので，地形図欄外の「陸軍参謀本部」等の字は切り取っておく。万歩計は，歩測でおおよその距離を知ることができる。集落分布図などの閲覧時に，複写できないこともあるので，トレーシングペーパーも用意する。

薬品としては，風邪薬・胃腸薬等に加え，抗生物質や下痢止めも持参した。二度ひどい下痢になったが，正露丸よりも，腸の活動を抑制する下痢止めの方が効く。

③文献資料収集

現地には，日本では見られない文献資料が多数あるので，大学図書館や省立図書館を訪問する。近年，新しい地方志とともに，県別の地名志も刊行されている。集落の沿革に言及するものもあり，調査先の地方志・地名志は必見である。珠江デルタの場合，香港在住の同郷会が機関誌を発行している

(多くは香港大学で閲覧可能)。同郷会は故郷との連絡が密で，調査に役立つ情報も多く載っている。

④県・鎮政府

現在，県以下の行政体系は，県～鎮・郷～村民委員会～村民小組となっている。村民委員会（広東では90年に，管理区弁事処に変更）は行政村とも呼ばれ，人民公社時代の大隊に相当する。村民小組は自然村とも呼ばれ，昔の生産隊に相当する。ひとつの集落であることが多いが，戸数の多い集落では，複数の村民小組がある。調査では，最初に県政府を訪問し，県志編纂者，国土局，文化局，農業や水利の工作者から歴史・現況を聴取したり，檔案館（文書館）で文書資料を収集する。檔案館の開放度は地域によって異なるが，解放前の県・鎮レヴェルの地方新聞や土地改革時の土地証を収蔵している場合もある。次に鎮（あるいは郷）政府を訪問し，鎮志編纂者，国土所，農業・水利・文化などの工作者から歴史・現況を聴取する。鎮レヴェル以下の情報は，公開文献ではほとんど得られないから，調査に入る行政村の選定を念頭において，情報を得る必要がある。なお，後述する「社」「坊」への関心は，県政府での聴取で得た示唆に始まるものである。

⑤行政村の選定

調査に入る行政村の選定基準は，歴史が新しい村と古い村，鎮に近い村と遠い村，その他特色のある村とし，前述の工作者や地名志の情報を参考に決定する。日程の都合もあるが，一行政村につき最低2日は必要である。調査村を選定しても，相手側の都合もある。鎮政府までは事前に訪問し，調査村をあらかじめ決めておいて，後日に本調査を行なうのが望ましい。行政村では，まず書記や主任から歴史・現況の説明がある。なお，各行政村の領域を写した航空写真を備えている所が多いから，見逃さないようにしたい。

⑥インフォーマントの条件

解放前の農村社会調査が目的であるから，この目的に適うインフォーマントを得られるかどうかが，調査の成否を握っている。条件として，以下の3点を希望した。第1に，本地で出生し，解放前に一貫して本地で生活した農民（できれば代々居住），第2に，年令70歳以上，少なくとも65歳以上（1920年代前半出生し，解放時に成人に達している），第3に，小作か自作かを問わず，解放前に自家で農業経営を行なっていたこと（富農を含む）。この希望は，パートナーや県・鎮政府を通じて，インフォーマントを捜しだす行政村に伝わる。ただし，間接的なため，意図が十分に伝わらないこともある。極端な場合，私自身は参加しなかったが，88年に江南デルタ予備調査を行なった濱島氏は，上記希望を出したが，出てきた農民は解放後生まれであった。この点に限らず，当方の調査趣旨が，相手側に十分伝わっていないことは意外に多い。調査の成否に関わるので，万全を期したい。

⑦採訪

まずインフォーマントの簡歴を尋ね，上記3条件を確認する。年令については，出生年を確認する。出生年があやふやな場合は，出生年の十二支を尋ねる。ただし，珠江デルタでは，自分の十二支を知らない人も稀ではなかった。なお，“科学的実験”の前提として，知らないことは「知らない」と回答し，伝聞・憶測による回答は遠慮して頂くよう，あらかじめお願いしている。次に簡歴を考慮しつつ，前記の調査項

■写真5・2・2　順徳県龍江鎮集北管理区の農家内部

目表に沿って質問する。採訪で新知見を得るごとに，項目を追加する。採訪は，たいてい行政村事務所で行なうが，昼食時に，インフォーマントが家に帰って食事をとると，昼休みが3時間位になってしまう。そこで当方負担で昼食を用意してもらい，採訪時間を節約する。また，余暇を利用して村内を見学する（写真5・2・2は見学した農家）。調査内容はその日のうちに整理し，不明点は滞在中に確認すべきであろう。インフォーマントへの謝礼は，鎮政府に相談するが，採訪に与らずに労働した場合の労賃が目安のようだ。

⑧食物・宿泊施設

食物については，とくに問題ないが，衛生面から，宿舎に戻った時や食前には石けんで手を洗っておきたい。宿泊施設については，民家に宿泊するのは基本的に不可で，主に鎮政府所在地のホテルや招待所（公用の宿泊施設）に宿泊する。ただし，江南デルタでは，鎮での宿泊はほとんど実現せず，県城での宿泊が多い。調査先の鎮が県城から遠い場合，県城との往復で時間が取られることもある。部屋はツインが一般的で，宿泊料は外国人と中国人で異なる。洗濯サービスが無いこともあるので，洗濯石けんを持参する。外貨は，県城や鎮の中国銀行で兌換でき，兌換率は全国一律である。日本円はT／Cに換えておいた方が安心だが，外貨の方が便利な時もあるので，ある程度は用意しておきたい。

⑨車

県城や鎮の宿舎と調査先の行政村との往復や景観観察には，車が不可欠である。農村では，タクシーは普及しておらず，車を保有する機関・企業からの賃借となる。保有者側の都合が優先されるので，いつも借りられるわけではない。車事情が違うので，交渉はパートナーに任せよう。なお，珠江デルタでは，鎮政府などが車・船を無償提供してくれたが，これは例外と考えた方がよい。レンタカーがあるかどうか不明だが，交通感覚が異なるので，自分で運転することはおすすめできない。

⑩贈り物

慣習が違うので，パートナーに相談する。県・鎮の政府や行政村に，掛け時計（「掛鐘」）を贈った。しかし，これを中国語で「送鐘」と言い，発音が「送終」（死をみとる）と同じなので，個人には贈れない。

■帰国・後片付け

調べ漏れは多くある。採訪時間が足りない時は，若干の項目についてインフォーマントにメモ作成を依頼することもある。帰国後に気が付いた場合は，手紙で尋ねる方法もあるが，翌年に数日の補充調査を組む方法もある。

収集した資料のうち，フィールドノートや再入手不可能な資料は，できるかぎり郵送せずに手荷物として持ち帰る。なお，郵送・帰国時に税関検査を受ける場合，パー

トナーの所属機関から，中身に違法なものがない旨一筆もらっておくと多少安心だが，使わないにこしたことはない。

帰国すると日常の仕事が待っている。しかし，調査でお世話になった方への礼状と撮った写真の送付だけは，1～2ヵ月のうちに済ませたい（写真が届くのを鶴首しているからだ）。礼状は，芳名録に載っている方々に出すが，その数は数十人に及ぶので，共通文面の礼状で我慢せざるを得ない。とくにお世話になった方には，別途文面を考えるか，共通文面に書き添えて送りたい。写真に写っている人を記憶力だけで同定するのは無理で，この時に前述のポラロイドが役立つ。各人ごとに小封筒を用意し，礼状と写真を入れる。所属が同じ人々の小封筒を一括して大封筒に入れ，所属機関宛に郵送して一段落となる。

■論文・まとめ

①報告書

県・鎮の各部門工作者，とりわけ古老からの聴取内容は貴重な口碑資料となる。自己に有用な部分は，論文作成時に紹介されるであろうが，それ以外は私蔵され，ついには死蔵されることもある。しんどい作業になるが，口碑資料を中心とする報告書を刊行し，公開利用に供したい。思わぬ誤解について，大方の教示を乞うことができるし，何よりも，後日，同一の調査地・テーマで調査を行なう人の参考になろう。報告書の体裁は，報告書1では実現できなかったが，『中国農村慣行調査』全6巻（1952～58）岩波書店，に倣い，質問・回答の各内容を生のまま（できれば原語）で収録し，加えて詳細な索引を付すのが最善であろう。文献で対照・確認できた点や疑問点その他も，コメントとして付け加えたい。

②論文

フィールドワークで得た知見には，文献資料が語り及ばぬものが多くある。たとえば，珠江デルタ順徳県の多くの集落では，現在でも，社（社公，社稷神とも呼ぶ。写真5・2・3）という小さな非人格神，あるいは土地公と呼ばれる小さな人格神が祀られている。古老の語る所を私なりに整理するなら，社（土地公を含む）は，流動性の高い農家が多数集まっているだけでは建設されない；定着農耕を営む多数の近接する

■写真5・2・3　順徳県大良鎮蘇崗管理区旧寨の雲龍社

農家の間に，一個の集団としてのアイデンティティが成立して初めて建設され（これを「開村」と呼ぶ），集団各々は某々社あるいは某々坊と呼ばれる；となる。すなわち，社・坊を，定着農耕を営む農家を構成要素とする地縁的社会集団の最小単位と理解できる（論文3）。これは，集落レヴェルの社会構造を解明するうえで重要な発見である。社・坊の語は地方志にも見いだされるが，当地の人々には常識的であるためか，関連説明はほとんど無い。文献から上記発見を導きだすのは困難なのである。

この発見は，文献資料中の未利用資源の

活用につながる。社・坊に関する知見の獲得によって，清末における県の統治体系の末端単位たる「村」の内実が判明したこと（論文３）や，従来，旧中国の集落については“領域の欠如”が通説となっていたが，少なくとも順徳県の集落（＝社・坊）については“領域の存在”を推測し得ること（論文４）などは，その一例である。その他，表面上は，文献資料のみで立論しているが，現地踏査での実見が背景として役立っている場合もある（論文２）。このように，文献も利用することで，インフォーマントが生きた時代・地域等の限界を越えた立論も可能になる。

フィールドで得た知見を再構成するだけで論文ができる場合もあろう。しかし，フィールド調査と文献研究との併用は，相互の限界を補って，体系的かつリアルな農村社会像の構築に貢献する。また，フィールドワークは，地図資料の価値を再認識する機会となった。立論にリアリティをもたせるうえで，小縮尺の地図が威力を発揮することを申し添えておきたい。

■ADVICE

文献を通じて馴染んだ場所や事物を目のあたりにするのは，まだ見ぬ恋人に会うようなもので，知らぬ間に作りあげた自分なりの像が試される。現地訪問で，自説が強固になることもあれば，再考のための示唆を得ることもある。いずれであれ，リアリティのある中国社会像の構築にプラスになることは確かである。そして，古老ですら知らぬ昔のムラのことが，文献に残っていて，私から古老に教えてさしあげる。こんなことだってありうる。このへんが文献を扱いながらフィールドワークをする妙味であろう。

古老とのコミュニケーションを正確で密度の濃いものにするには，言語の修得は不可欠である。華北を除き，農村では，「普通話」は通じないと考えた方がよいだろう。「普通話」に加えて，自分の研究対象地域の方言（広東語や上海語など）を修得する必要性を銘記しておきたい。

お世話になった方々に謝意を表するために，またコミュニケーションの一環として招宴をするのが通例である。なかには酒豪もいるので，覚悟しておこう。歌で宴を盛り上げたり，手品で返杯をかわしたりする工夫も必要のようである。

（付記）フィールドワークを通じて，上司かつ共同調査者である濱島敦俊教授からは，学術面に限らぬ多くの薫陶を賜った。記して，感謝の意を表したい。